

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00056

研究課題名（和文）鄭玄周礼学の研究

研究課題名（英文）Zheng Xuan's scholarship on the rites of the Zhou dynasty

研究代表者

古橋 紀宏（FURUHASHI, Norihiro）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：90832296

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では以下の点を明らかにした。鄭玄の礼学において、『周礼』よりも緯書が中心に位置づけられている。鄭玄の上古の歴史観も緯書を採用し、『世本』・『史記』・『大戴礼記』に採用された「帝系」の歴史観とは全く異なっていた。鄭玄説に対して当時の現実や通念の立場から批判した者は、王肅のみならず当時幅広く存在していた。鄭玄説に反対し、経書解釈から緯書の影響を排除しようとする立場は、王肅・鄭沖らから、『偽古文尚書』とその孔安国伝へと継承された。『偽古文尚書』が知識人に受容された理由として、当時の天文学的研究が既に緯書に対する疑念を惹起していたことが挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、漢から唐の経学は、漢唐訓詁学として一つに分類されることが多い。しかし、本研究により、鄭玄説の中心には緯書が位置づけられ、鄭玄の歴史観も緯書に依拠し、曹魏においてはその鄭玄説が採用され、『史記』の歴史観が否定される状況にあったことが明らかになった。そして、鄭玄説は当時の現実社会や通念に必ずしも適合していなかったため、鄭玄説に代わり、緯書の影響を受けない経書解釈が社会的に求められ、それが『偽古文尚書』とその孔安国伝の偽作と受容の背景となったことも明らかになった。これは、魏晋時代の経学が社会に適合するために変化したと捉えられ、この変化は以後の経書解釈を規定した点で重要な意味を持つものである。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the following: (1) In the ritual scholarship of Zheng Xuan, Confucian apocryphal texts are placed more centrally than Zhouli. (2) Zheng Xuan's historical views on the legendary era are also based on articles in Confucian apocryphal texts, completely different from the historical view of Dixi adopted by Shibei, Shiji and Dadailiji. (3) Wang Su was not the only one who criticized Zheng Xuan's views from the perspective of the reality and conventional wisdom of the time; similar criticisms existed widely at the time. (4) Positions that opposed Zheng Xuan's views and tried to eliminate influence of Confucian apocryphal texts from interpretation of Confucian canons were inherited from Wang Su, Zheng Chong and others to the fabricated old-script Shangshu and Kong Anguo's commentary on it. (5) The reasons why the fabricated old-script Shangshu was accepted by the intellectuals of the time include their doubts about Confucian apocryphal texts due to astronomical research.

研究分野：中国哲学

キーワード：鄭玄 周礼 緯書 帝系 王肅 鄭沖 偽古文尚書 孔安国伝

1. 研究開始当初の背景

中国の魏晋南北朝時代は、国家制度の中に、儒教の経書で説かれる周王朝の制度が取り入れられた時代である。制度は経書解釈学において礼に属し、当時の礼学における有力な解釈は後漢の鄭玄の説であったため、当時の国家制度に対する経書の影響を正確に把握するには、鄭玄の解釈による周の制度を解明することが必要不可欠である。しかし、史実としての周の制度ではなく、鄭玄によって理念的に構築された周の制度について、その全体的構造を明らかにした研究は行われていなかった。

2. 研究の目的

先行研究では、鄭玄の礼学説は、経書の一つである『周礼』を基準として、経書間の矛盾を解消しようとしたものであると言われていた。そこで、本研究では、鄭玄によって『周礼』を中心として体系的に構築された周制解釈の全体的構造とその特質を明らかにし、魏晋南北朝時代の国家制度に対する経書の影響の実態解明に役立てることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、魏晋南北朝時代において鄭玄説と対立した諸学説を鄭玄説と比較することにより、鄭玄説の特質を解明する方法を採用した。そこで、研究開始当初は、曹魏において鄭玄説と対立した王肅説と鄭玄説との比較を行い、続いて、東晋以後に鄭玄説を否定する根拠となった『偽古文尚書』およびその孔安国伝と鄭玄説との比較を進めた。

4. 研究成果

(1) 鄭玄礼学説の中心に位置する文献について

本研究では、鄭玄の礼学説において中心に位置づけられている文献は、緯書と考えられることを指摘した。

鄭玄礼学説の中心に位置する文献について、加賀栄治(1964)は、鄭玄の天子宗廟説を挙げ、鄭玄の礼学説が『周礼』を中心として三礼を体系化したものであることを論じた(103頁-106頁)。この見解は間嶋潤一(2010)にも継承されているが、一方で間嶋氏は鄭玄説が緯書の影響を強く受けていることも論じている。しかし、鄭玄の礼学説における『周礼』と緯書との関係については、十分に解明されていなかった。そこで、本研究では、鄭玄の礼学説における『周礼』と緯書の位置づけを考察した。そして、加賀氏が取り上げた鄭玄の天子宗廟説についてその根拠を検証したところ、鄭玄説の核心部分は、『周礼』の本文ではなく、緯書によって構成されていることが確認された。このことから、鄭玄説の中心に位置している文献は緯書であり、鄭玄は緯書を中心に諸文献を体系化して自説を構築し、それを表現する手段として『周礼』注の形式を用いたと考えられる。

(2) 鄭玄の歴史観について

本研究では、鄭玄説における緯書の影響は歴史観にも及び、鄭玄の上古の歴史観は、『世本』・『史記』・『大戴礼記』に採用された「帝繫(帝系)」の歴史観とは全く異なっていたこと、また、鄭玄の上古の歴史観は曹魏において採用されたが、西晋時代に至り皇甫謐の『帝王世紀』では採用されなかったことを明らかにした。

本研究で取り上げたのは、上古の伝説上の帝王「帝魁」である。「帝魁」は、前漢以前には神農と同一の帝王として認識されていた。しかし、緯書の一つ『尚書緯』では、「帝魁」は黄帝の玄孫に当たる帝王として記され、その歴史観は、『世本』・『史記』・『大戴礼記』に採用された「帝繫」の歴史観とは全く異なるものであった。曹魏において皇帝の命を受けて鄭玄・王肅両説の対立を評定した張融は、黄帝の玄孫「帝魁」の存在を根拠として『史記』・『大戴礼記』の記事を否定しており、これは、曹魏において緯書や鄭玄の歴史観が公的に採用されたことを示している。一方、王肅が依拠した『孔子家語』は「帝繫」の歴史観を採用しているが、そこには緯書の歴史観を否定しようとする意図が認められる。当時はその他にも上古史について多様な歴史観が存在していたが、西晋の皇甫謐が『帝王世紀』を編纂した際には、基本的に「帝繫」の歴史観を採用し、黄帝の玄孫「帝魁」は否定され、それが以後の歴史観を大枠において規定することになった。

(3) 鄭玄説の特質とそれに対する批判について

本研究では、鄭玄説は緯書を中心として諸文献を体系的に解釈した繁雑な説であったため、当時の現実や通念と相反するものとなっており、鄭玄説に対する現実や通念の立場からの批判は、

王肅のみならず、当時幅広く存在していたことを明らかにした。

范曄『後漢書』の鄭玄伝は、鄭玄の説について、「通人は頗る其の繁を譏る」と記載する。これは、当時の「通人」が鄭玄説の繁雑さを批判していたことを述べたものである。加賀栄治(1964)は、「通人」について、「具体的には後漢末の大儒鄭玄のような、博覧多通の学者をさす」(25頁)と説明するが、『後漢書』鄭玄伝の記述から、鄭玄は当時において必ずしも「通人」とは考えられておらず、後漢末の知識人の中で鄭玄説に批判的な立場をとる者は幅広く存在していたことが推察される。また、後漢末から魏晋時代にかけて活発に行われた肉刑復活の議論も、当時の礼制の議論と同じく、漢の制度に代わる新たな儒教的制度の整備に伴う議論の一環として位置づけられるが、その議論において、王肅の父である王朗は、現実を重視して肉刑復活に反対していることから、礼制の議論において現実的観点から鄭玄説を批判した王肅の立場も、王朗から継承されたと考えられる。

(4) 鄭玄説批判と『偽古文尚書』との関係について

本研究では、曹魏明帝期において台頭した鄭玄説に反対し、經書解釈から緯書の影響を排除しようとする立場は、明帝没後に何晏とともに『論語集解』を編纂した王肅・鄭冲らから、東晋において奏上された『偽古文尚書』とその孔安国伝に継承されていることを明らかにした。

本研究では、『尚書』の解釈と密接に関わる『論語』堯曰篇の解釈を取り上げて考察を行った。『論語』堯曰篇「天禄永終」の解釈は、何晏らの『論語集解』の説と、朱熹の『論語集注』の説とに大きく分かれる。朱熹と同様の解釈は、早く漢魏王朝交代時の告天文において確認され、またその後、曹魏明帝期の詔冊においても複数採用されているが、經書の注釈としては、『群書治要』所引『尚書』舜典注において明確に記載されている。『群書治要』所引『尚書』舜典注の当該部分を検証すると、それに続く部分は緯書の影響を受けた鄭玄説の特徴を示すことから、当該部分も鄭玄または鄭玄学派の説と推定される。一方、『論語集解』の説は、漢代における一般的な解釈であり、曹魏明帝の没後まもなく『論語集解』に採用されたものであることから、そこには、明帝の詔冊に採用された鄭玄または鄭玄学派の説を熟知したうえで、それに反対する意図があったと認められる。また、『論語集解』の説は、曹魏末における元帝の譲位の策にも採用されており、その策には『論語集解』の編者の一人である鄭冲が関わっていることから、それは鄭冲の説と推定され、さらにその説は『偽古文尚書』孔安国伝にも継承されている。このように、緯書の影響を受けた鄭玄説に対する批判的な立場は、曹魏の王肅・鄭冲および『論語集解』から、『偽古文尚書』とその孔安国伝へと継承されている。但し、『論語集解』には鄭玄説が多く採用されていることが問題となるが、『論語集解』で採用されている鄭玄説は緯書を基盤としていないものであることから、当時、鄭玄説を必ずしも全て否定するのではなく、その緯書の影響について排除しようとする試みがあったことがわかる。その後、東晋において奏上された『偽古文尚書』には、緯書隆盛前の学者である孔安国に偽託された序と伝が付けられていたが、それは、緯書の影響を受けていない經書解釈を求める魏晋時代の社会的要請に応じたものであったと考えられる。

(5) 『偽古文尚書』受容の背景について

本研究では、『偽古文尚書』が東晋において奏上された際、当時の天文学の研究が既に緯書に対する疑念を惹起しており、そのことが、緯書の影響を受けていない『偽古文尚書』とその孔安国伝が早期に受容される背景となったことを指摘した。

東晋の元帝期に『偽古文尚書』が奏上された後まもなく、虞喜は『偽古文尚書』を信用し、天子宗廟に関する『偽古文尚書』の記事を史実として認定している。『偽古文尚書』には王肅説と合致する内容が多く見られるが、虞喜は必ずしも王肅説を支持する立場に立つ者ではなく、喪服礼の追服に関しては鄭玄説を支持している。鄭玄説に対する虞喜のこのような立場の二面性は、天子宗廟に関する鄭玄説が緯書に依拠して構成されたものであったのに対し、追服に関する鄭玄説は緯書に依拠したものではなかったことによるものと考えられ、緯書の影響を排除しつつも鄭玄説を全否定はしなかった『論語集解』の立場の二面性と共通している。虞喜は天文学において歳差を発見するとともに、緯書とは相反する安天論を主張していることから、緯書に対して疑念を持っていたと推察され、虞喜のように天文学の領域において緯書に対する批判的な研究が進められたことが、緯書の権威や信用を相対化し、そのことが、緯書の影響を受けていない『偽古文尚書』とその孔安国伝が早期に受容される背景となったと考えられる。なお今後の研究課題として、『偽古文尚書』の泰誓篇は、鄭玄らが注解した『古文尚書』の泰誓篇とは全く異なるものであったが、鄭玄らが注解した『古文尚書』の泰誓篇は緯書の記述と類似していることから、『偽古文尚書』泰誓篇が新しく偽作され、またそれが受容された背景にも、經書解釈から緯書の神秘性を排除しようとする積極的な意図があったと推察される。

引用文献

- 加賀栄治(1964)『中国古典解釈史 魏晉篇』勁草書房
間嶋潤一(2010)『鄭玄と『周礼』』明治書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 古橋紀宏	4. 巻 10
2. 論文標題 鄭玄の天子宗廟説と緯書・『偽古文尚書』	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 一一～二五
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古橋紀宏	4. 巻 47
2. 論文標題 漢魏における「帝魁」伝説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 香川大学国文研究	6. 最初と最後の頁 45～75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋紀宏	4. 巻 46
2. 論文標題 『群書治要』所引『尚書』舜典注に見える鄭玄説と曹魏明帝期の經書解釈	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 香川大学国文研究	6. 最初と最後の頁 94～115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FURUHASHI Norihiro	4. 巻 120
2. 論文標題 The Ritual Scholarship of Cheng Hsuan and Wang Su	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA	6. 最初と最後の頁 1～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋紀宏	4. 巻 1
2. 論文標題 漢魏の経学の変化と鄭玄・王肅の礼学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 九～一九
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 古橋紀宏
2. 発表標題 鄭玄の礼学説と緯書・『偽古文尚書』
3. 学会等名 令和五年度四国東洋学研究者会議(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古橋紀宏
2. 発表標題 鄭玄・王肅の礼学
3. 学会等名 第64回国際東方学学会議・東京会議・シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 川原秀城・井ノ口哲也・平澤歩・田中良明・古橋紀宏・池田恭哉・南澤良彦・木下鉄矢・水上雅晴・陳捷・新居洋子・渡辺純成・志野好伸	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 漢学とは何か	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------